

仏の願い

平成 28 年 西雲寺だより 夏号 (47 号)

永代経のご案内

7 月 10 日 (日) ~ 11 日 (月)

10 日 お逮夜 (2:00~) お初夜 (7:00~)

11 日 お日中 (10:00~) お逮夜 (2:00~) お初夜 (7:00~)

法話 福井 野世信水 師

——11 日はバスが出ますのでご利用下さい——

放送会館前発 (8:50) ~ 東別院前 ~ 工大温泉前 ~ 西安居經由
坪谷発 (9:00)

常森発 (9:00) ~ 国見 ~ 鮎川
~ 小丹生經由

万障お繰り合わせの上
お誘い合わせて
お参り下さい



釈尊の生涯とその教え③

出家

出家の動機

前回お釈迦さまの出家の動機として、四門出遊について述べた。それはお釈迦さまの多感な少年時代のことと思われる。ある日、東の城門から外に出た際に老人の姿を見てシヨックを受けた。それまでは太子が美しいものしか目にしないよう、父王が遠ざけていたのである。そして別の日には、南の城門を出て病人を目の当たりにし、西の城門を出た際には、悲しみに包まれた葬列に出くわして、老病死という世の悲しみというものを知った。その後北の城門から出て、出会った修行者に感銘を受け、いつの日か出家する気持ちは強めたというものである。この物語は何を私たちに語っているのだろうか。いくらお城のなかで過保護に育てられたといってもお釈迦さまは人間というものは、年をとり、病気になる、死ぬものであるという事は知っておられたことと思われる。しかしそれはどこまでも他人ごとで、自分もまた老病死するものは自覚していなかったのである。四門出遊を通して初めて自分もまた、老病死するものとして目覚められたのである。私たちも年をとると、朝起きて新聞に目を通す際、一番初めに開けるのは死亡欄である。「まだ自分より若いのに亡くなってお気の毒に」と思っても、どこまでもそれは他人事で、自分も明日といわず死すべき身であるとは

思わないのである。仏伝にお釈迦さまは次のように語っておられる。

いのちの事実に気づかぬ者たちは、自分自身、老いるもの、病むもの、死ぬものであり、老いること、病むこと、死ぬことを避けられぬ身でありながら、他人が老い、病み、死ぬのを見ると、自分のことは見過ごして、とまどったり、忌み嫌ったりしている。実は私自身も、老いるもの、病むもの、死ぬものであり、老いること、病むこと、死ぬことを避けられぬ身でありながら、他人が老い、病み、死ぬのを見て、とまどったり忌み嫌ったりすべきであろうか、いや、それは決して正しいことではないと、私がそのように自身を省みた時、若さに対する空しい誇り、健康に対する空しい誇り、生存に対する空しい誇りは消え失せてしまったのである。

結婚

シッダールタ太子は十九歳になられた。憂いに沈む太子に父王は結婚を勧めた。結婚をし、世継ぎをもうけることは、国のためにも大切なことであった。釈迦族のしきたりに従い、他の若者たちとの武芸の競技に臨んだ太子は、これに勝利し、美しいヤシヨードラ姫と結婚した。長らく子宝に恵まれなかった太子に男子が生まれ、ラーフラと名付けられた。世継ぎが誕生して、今は思い残すこともなくなった太子は、いよいよ出家の決意を新たにされるのであった。

大いなる出離

沈みふさぎこむことの多い太子を心配した父王はある夜、多くの美しい舞姫や楽人を集め、饗宴をひらいた。酔いもまわり、太子もしばしまどろんで目をさますと、舞姫や楽人たちは疲れて、あられもない姿で眠りこけていた。いびきをかくもの、よだれを垂らすもの、叫ぶもの、先ほどのいきいきとした、きらびやかな姿はどこにもなく、ただ悲しく生活のつかれに沈みこんでいる姿だった。「今こそ！」と太子は、そつと愛児に別れを告げ、宮殿の外に出た。愛馬カンタカにうち跨り、馬丁のチャンナがくつわをとった。太子の出家を祝う天の神々が、カンタカの脚を支えて、蹄の音を消した。城門が閉まっていたので太子たちは城壁高く跳び越えて、満天に星の降る城外に出た。このとき、太子は御歳二十九歳であった。

出家とは

出家とは家を出ることである。この場合の家は単なる家庭ということではない。日常生活の場所である。欲望や愛着の念で縛られた場所である。この家を出て、老病死の苦を真実に超えていく道を求めて歩むのが出家である。そのためには恩愛の絆でむすばれている父母、妻子兄弟なども捨てなければならぬ。太子は二十九歳にして出家したということ。太子は二十九歳にして出家したという事は、慈愛の父王、生母に代わって自分を育ててくれた義母、それに敬愛を持って優しくつかえてくれた妃、それらの人々の歎きを思うと太子の堅い決心がにぶったこともあったと思われる。太子

が最後にチャンナと別れて一人となるとき、仏伝は次のように、家族に対する伝言を述べている。

世の人は富み榮えて、地位の高いものには競ってつかえるが、貧しく賤しい者には、遠ざかる。それに汝は独り、国を捨てた私に従って遠くここまで来てくれた。まことに殊勝なことである。と身につけておられた美しい衣服を脱いで従者チャンナに与えチャンナの粗末な服と交換された。そして髻（もとどり）を解いて、摩尼宝（まにほう）をだし「チャンナよ、汝は今より帰ってこれを大王にささげ、次のように申してくれ。太子は世のなかのことは何も求めるものがない。人は皆、恩愛の情につながれるが、ついには老病死をまぬがれることはできない。どうかこの理（ことわり）を思つて憂いを除いて下さい。太子はさとりをえない間は決して帰りませぬ」とまた瓔珞（ようらく）を脱いでチャンナに渡し、「これは義母君にささげてくれ。そして申してくれ。欲は苦の本である。太子は出家してこの苦しみの本を断とうと思ひ立った。どうか憂いを除いて下さい」と、さらにその余の装身具の品々を渡して「これを妃に与えて伝えてくれ。人の世は必ず別れの悲しみがある。太子はその悲しみの本を断とうと思ひたった。恋着の情にひかれて憂いに沈んではならぬ」と、チャンナは泣きくずれて俱に出家を願ひ出たが、ついに許されず、声を放つて泣きくずれた。

修行の地を求めて

一人の修行者となったお釈迦さまは、沙門（出家者）が多く集まっていたマガダ国の首都、王舎城（おうしゃじょう）を目指して旅に出た。王舎城は当時のインドのなかでもっとも先進的な場所だったのである。後に悟りを開いたお釈迦さまが、私たちに託つて最も大切な『大無量寿経』や『観無量寿経』を説かれた地である。

お釈迦さまの住んでおられたカピラ城から王舎城までは六百キロ程の距離がある。修行者となったお釈迦さまは途中の村々で食を乞いながら、ガンジス川の岸辺につかれた。このあたりの川幅は数キロある。雨期（七月～九月）あけまでは激流が渦まき、とても渡ることはできない。冬（十二月～二月）から夏（四月～六月）にかけては水が少なく、渡ることができるのである。川の南側はピンバシヤラ王が統治する元気に満ちた新しい国、マガダ国がある。都の王舎城には、バラモンの教えに疑問をもった学者が集まり、思い思ひの学説を競いあつていた。お釈迦さまはこの地で、よき師に出会つて教えを請おうとされたのである。

お釈迦さまは、ある岩蔭に居を定め、日に一度街に下りて托鉢に出られた。ある日のこと、王舎城の高楼からお釈迦さまの気高い姿を見られたピンバシヤラ王は、あとを追つて岩山のお釈迦さまをお訪ねになり、「修行者よ、あなたはきつと立派な王様になられるお方です。私の国の半分を差し上げましょう。二人で世界を征服しようではありませんか」お釈迦さまは答えられた。「私の求めているのは、国や財産ではあり

ません。どんなに苦しくても、いつの日か必ず真理を究め、それをば王よ、あなたにもお教えすることを約束しましょう」と。

修行（禅定）（ぜんじょう）

当時インドでは二通りの修行方法があつた。一つは禅定主義、一つは苦行主義であつた。禅定とは座禅のようなもので、ふだん散乱して、さまざまな事柄に振り回されている私たちの心を集中して、煩惱の束縛から自由になろうとする方法である。苦行主義は欲望のもとである肉体を極限まで痛めつけて、精神の自由を得ようとするものである。お釈迦さまは初め二人のよき師と出会い、禅定を修行した。お釈迦さまは禅定によつて、よき師と同じ境地に達したが、その境地はその時だけのものであつた。お釈迦さまは禅定では、老病死の不安のない真実の境地は得られないと、さとして二人の良き師のもとを去つたのであつた。

修行（苦行）

禅定主義を捨てたお釈迦さまは気分一新して、苦行の地を求めて、マガダ国を南に下り、森がこんもりと茂り、尼蓮禅川（にれんぜんが）の清流があふれるウルベーラ村の林の中で、仙人の仲間に入つて、死ぬか生きるかの六年に及ぶ苦行に入つたのである。

（住職）

熊本地震救援金のお礼

皆様からお預かりしました救援金は、おかげさまで20万円を超えました。本山を通して熊本の寺院ならびにお同行へお届けいたします。温かいお志をありがとうございました。

（よろしければ引き続き福島の子供たちへの支援もお願いいたします）

お寺を支える・法事を支える

おかげさまに感謝

これはほんの一例です

永代経や報恩講のおとき、また納骨などのおもてなしに使う1年分のミズブキを、たくさんの方々が採ってきてくださいます。本当に有り難いことです。



図書紹介

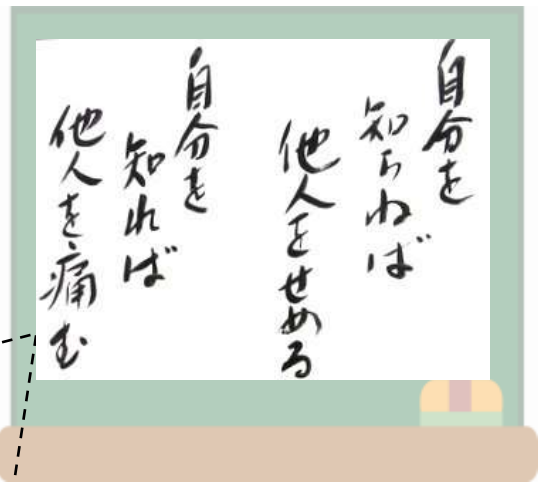


『健康であれば幸せか』
駒沢勝著

法蔵館
2000年
税込411円

駒沢さんは小児科のお医者さんです。若いときは仏教が大嫌いだったといっています。
お母さんのお腹に宿った双子のうち、ダウン症だと分かった子の心臓をめぐって針を刺していく、つまりその子を殺すという医療があるそうです。その一方で、自分で排泄もできなくらい不自由な人が書いた「生きててよかった。重い病気になつて初めて生きる喜びをしまった」という詩に接して、健康とは別のところに幸せがあることを、強く感じられたそうです。
健康とか病気とかに関係なく絶対的に肯定する仏教の愛、それに対して病気を憎み、否定する医学、そこに気がつかれたそうです。
7月3日には、佛光寺派福井教区の門徒研修会にお越しいただく予定です。この本はインターネットでの注文をおすすめいたします。

山門掲示板



私たちは家庭での食卓を囲んでの会話、また仲のよい友だち同士の会話のなかで、話の盛り上がるのは、人や世の中を批判したり、悪口をいうときです。人を誉めたり、自分を反省するような会話はめったに出てきません。またそのような話は面白くありません。『歎異抄』第三条に「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」とあり、真宗の教えは善人でなく悪人が救われていく教えです。しかし、これはなかなか納得のいかないことです。私のような善人が救われていくのがお念仏の教えではないのかと、腹のなかでは思っているのではないのでしょうか。善人とは、自分の思いや考えを絶対間違いない、正しいものとして固執して他人や世の中を責め、批判してやまない人です。私たちはどれだけお説教を聞いても善人ではないでしょうか。人を責め、傷つけてやまない愚かな悪人でしたと、如来さまの前に頭が下がるときがくるのでしょうか。

(住職)

疑いも縁 納得も縁

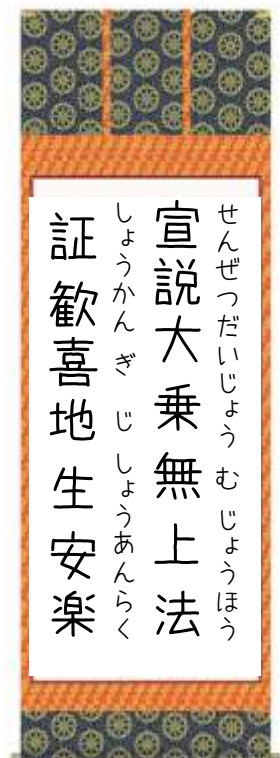
意味

読み方

☆証拠の証ってすごい字だなあ…絵に描いた餅じゃなく、今あかしするって意味だもんなあ。
★でも、なんで歓び(喜び)なんだろう…
仏教って死んだ後のためじゃなかった？

自分一人が救われる乗り物ではなく、すべての生きとし生けるものが一緒に救われていく大きな乗り物を、龍樹という先輩はお釈迦様から受け継がれました。そして、一人乗りでなく大きな船に乗りたい！という心が湧いてきたことこそが救いだ、と、喜ばれました。

だいじょうむじょう ほう せんぜつ
大乘無上の法を宣説し
かんきじ しょう あんらく しょう
歡喜地を証して安樂に生ぜん



『正信偈』に先輩の感動あり！



新潟・弥彦
梨本哲哉師

ご本山差し向け布教

6月14日～17日

お同行宅のお座敷で布教がつとまるのは、全国的にも珍しく、伝統を受け継いでいけるのも、本当に皆さまのおかげです。

武周
西雲寺
おみ堂



安田
末定育雄氏宅

本堂
池田敏雄氏宅



素朴な疑問 仏花を供える向きは？



お花をお供えするとき、花を手前に向けますか？それとも阿弥陀さまやお墓様の方に向けますか？

手前に向けますよね。でも、あれれ？お花は仏さまに差し上げるんじゃないかなったのでしょうか…向こうに向けるのが本当じゃないのでしょうか…

皆さんはどう思われます？

浄

法名に 育てられる

<読み方>…じょう

<意味>

1) 清い仏の心です。個人の欲を超えて平等の幸せを願う無数の先輩の心です

2) 動詞です。清めるという動きです。例えばバスで妊婦さんに席を譲るのは、私の心が清いではありません。先輩から教えられ、育てられたからです。

発行

真宗仏光寺派 専念山 ^{さい うん じ}西雲寺

住職 護城一寿

筆頭総代 末定育雄

編集責任者 護城一哉

〒910-3523 福井市武周町5-2

電話 0776-97-2138

メール kmgojo@mx3.fctv.ne.jp

ホームページ <http://arukou.net/>

次世代の方、分家された方に！

お寺から郵送いたします。どうぞ遠慮なくお申し出下さい。

みなさんの声 大募集！

原稿や作品はもちろん、ご意見、ご感想など、どしどしお寄せ下さい。郵送でもメールでも構いません。お待ちしております。